

教員の県外派遣事業による 中核教員の育成と学力向上をめざした取組について

—学力向上コアティーチャー養成・活用事業を通して—

学力対策課 指導主事 峯 容 子

【要旨】 学力向上コアティーチャー養成・活用事業とは、学力向上に成果を上げている県外の学校への教員派遣や授業実践等を通して、学力向上に向けた専門性とリーダー性を備えたコアティーチャーを養成すること、また、研修成果等の普及により県全体の学力向上を推進することが目的である。本事業で行っている取組の内容と、本事業の活用事例を紹介し、今後の展望等について報告する。

【キーワード】 教員の県外派遣、授業力向上、家庭学習の習慣化、学力向上対策

1 事業趣旨

学力向上コアティーチャー養成・活用事業とは、学力向上に成果を上げている県外の学校に本県の教員を派遣し、実地研修や学んだことを踏まえた所属校での授業実践等を行うことにより、学力向上に向けた専門性とリーダー性を備えたコアティーチャーを養成すること、また、受講者が研修成果等を普及し、県全体の学力向上を推進することを目的として実施しているものである。

本県では、学力の向上が喫緊の課題であり、全国学力・学習状況調査結果において、教科の平均正答率は全国平均を下回り、全国的に見て比較的下位に低迷してきた。特に、平成26年度と同調査において、小・中学校とも全ての教科で全国平均を下回る結果となり、全国平均との差も拡大傾向にあることが明らかになった。県教育委員会では、この結果を受けて教育庁内に「学力向上対策本部」を設置して、課題を改善する方策等について集中的に協議し、平成27年2月に平成27年4月から平成29年3月までの2年間で取り組む「和歌山県学力向上対策中期計画」（以下、「中期計画」）を策定した。本事業は、この「中期計画」に位置付けた取組の一つであり、今年度で3年目の実施となる。平成27年度は秋田県大仙市に30名、平成28年度は秋田県大仙市と福井県福井市に30名、今年度は秋田県大仙市に16名の教員を派遣し、3年間での本事業受講者は76名

となっている。

受講者については、「県内8地方の中核教員の育成」と「研修成果等の各地方への普及」という点から、優れた授業力をもった次代の教育を担う教員を市町村教育委員会から推薦していただき、各地方の教員数を踏まえて派遣している（表1）。

表1 学力コアティーチャー養成・活用事業の
地方別受講者数

地方	小学校	中学校	合計
和歌山市	10名	6名	16名
海草	3名	2名	5名
伊都	6名	3名	9名
那賀	5名	3名	8名
有田	5名	3名	8名
日高	8名	3名	11名
西牟婁	7名	3名	10名
東牟婁	6名	3名	9名
全体	50名	26名	76名

なお、今年度は、本事業を「中期計画」終了を受けて策定した「平成29年度学力向上対策」の取組に位置付けて実施している。

2 平成29年度事業について

本事業の内容は、「事前研修」「実地研修」「報告会」「事後研修」である。今年度は、和歌山市から6名、海草地方から1名、伊都地方から2名、那賀地方から2名、有田地方から1名、日高地方から1名、西牟婁地方から2名、東牟婁地方から1名の合計16名の教員

(小学校10名, 中学校6名)が本事業を受講した(図1)。

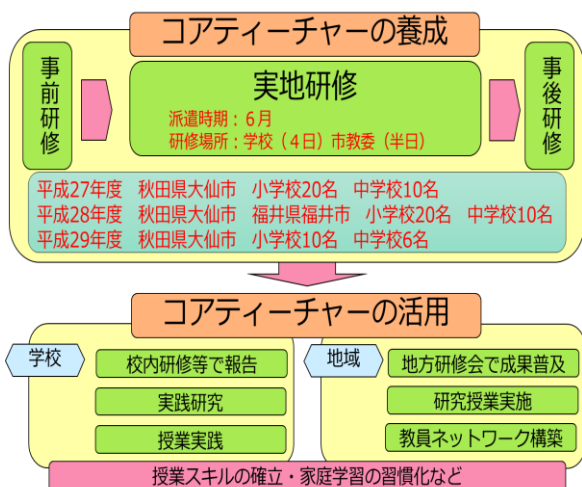


図1 学力向上コアティーチャー養成・活用事業

(1) 事前研修

日時: 平成29年5月26日(金)
 場所: 和歌山県庁南別館
 内容: 事業内容等の説明
 昨年度の受講者による実践報告
 グループ協議

事前研修では, 受講者が事業内容を把握し, 自身の役割等を認識するとともに, 実地研修等で学んだことをどのように実践, 普及していくかについて見通しをもつことをねらいとしている。「事業内容等の説明」では, 本事業の目的や内容と, 全国学力・学習状況調査結果から見える学力の現状及び県教育委員会の学力向上の取組について説明した。この2点について受講者に説明を行った目的は次の2点である。1つ目は, 本県の学力に関する現状と課題, 成果指標を正確に把握してもらうことである。そして, 2つ目は, 本事業が学力向上対策の一つであり, 今後, 受講者が県下で授業改善等の中心となって活躍し, 和歌山の学力向上の中核を担うことを意識してもらうことである。

「昨年度の受講者による実践報告」では, 受講者が実地研修で学んだことをどのように実践したのか, 具体的な事例を知ることによって, 自身の実践の見通しをもてるようにした。

「グループ協議」では, 受講者が自校の課題等を踏まえ, 「研修に臨む際の視点」を明確にできるようにし, 実地研修への円滑な接続を図った(写真1)。



写真1 グループ協議の様子

(2) 実地研修

日時: 平成29年6月26日(月)
 ~6月30日(金)
 場所: 秋田県大仙市立大曲小学校
 秋田県大仙市立大曲中学校
 大仙市教育委員会
 内容: 学力向上の取組等についての調査
 授業実践など

実地研修では, 大仙市立大曲小学校, 大曲中学校において, 学力向上を図る取組や学校運営, 学級経営, 地域との連携について管理職や各校務分掌の担当者等から説明を受けた。また, 授業を参観し, 1時間の授業構成や児童生徒の学習内容の理解を深める板書方法等を学んだ。

秋田県では, 全教育活動を通して取り組む重点課題として平成23年度より「『問い』を発する子ども」の育成を掲げており, 「秋田の探究型授業」(図2)は, 授業においてその教育課題を推進するための手立てである。

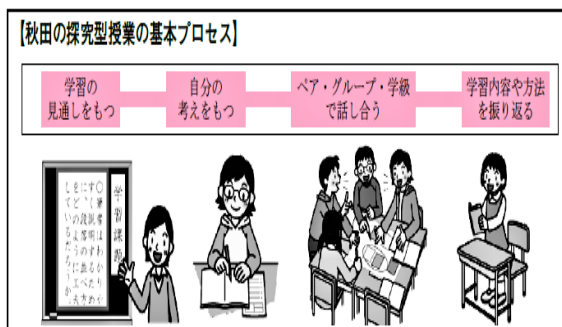


図2 秋田の探究型授業の基本プロセス (H29「学校教育の指針」 秋田県教育委員会)

そして, この探究型授業を一層充実させる取組として, 教科を問わず統一した授業構成や板書の仕方等をまとめた「秋田スタンダード」(図3)を示しており, どの授業でもその「秋田スタンダード」に沿った「探究型授業」

を実践している。

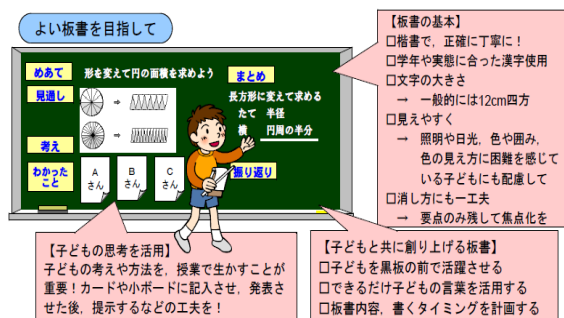


図3 子どもの思考の足跡が分かる板書に
(H29「AKITA STANDARD あきたのそこちから
一授業の基礎・基本」秋田県総合教育センター

受入校での聞き取りを行う中で、この県の施策が、教職員一人一人にまで周知され、徹底して取り組まれている様子を実感した。県の施策を推進するため、県だけでなく市も具体的な手立てや資料を示し、それが学校において管理職のリーダーシップのもと実践されていた。よって「秋田スタンダード」が実現し、今の時代に求められる授業を、教員は高い水準で実践できるという現状があった。

受講者は、受入校の先生方によるサポートのもと、学力向上に効果的な探究型の授業を実践することにより、研修を深めた(写真2)。



写真2 授業実践の様子

本県でも、秋田県の「探究型授業」と同様に、授業の基本スタイルを示すため、平成25年10月から「和歌山の授業づくり 基礎・基本3か条」(図4)を示している。このような学力向上に効果的な授業構成を受講者が実感することで、授業改善への取組を実践・普及する役割をコアティーチャーは担っている。

また、今年度は、「家庭学習」を实地研修の主なテーマとしており、受講者は受入校で配属された学年において、家庭学習の習慣化を図る取組等について学んだ。

「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」の充実

図4 「和歌山の授業づくり
基礎・基本 3か条」

(3) 報告会

受講者は实地研修後、所属校だけでなく、各地方の教育支援事務所主催、当該市町村教育委員会主催の研修会等で研修成果を報告し、学力向上に効果的な取組等について普及を図っている。教頭や教務主任といった対象を限定した会議でも、その対象者の立場に即した内容を報告している。

これらの報告を聞いた教員からは、所属校での取組に生かしているという報告もあり、徐々に本事業の成果は広まっている。

なお、今年度は延べ34回の報告会を実施している。

(4) 事後研修

日時：平成30年1月5日(金)
場所：有田総合庁舎
内容：実践発表、グループ協議

事後研修では、大曲小学校と大曲中学校に派遣された受講者各1名が、所属校での実践や各地方での普及について発表を行った(写真3)



写真3 実践発表の様子

グループ協議では、「和歌山で実践すべき学力向上の取組の普及」と、学習習慣の確立を

めざした「家庭学習の取組」の2つについて協議を行った。「家庭学習の取組」については、「5つの視点」(①どのような家庭学習に取り組ませるか、②教員は家庭学習に対してどのような指導を行うか、③授業と家庭学習をどのように関連させるか、④児童生徒個々の現状に合わせてどのように家庭学習を設定するか、⑤「家庭学習の手引き」と授業をどのように関連させるか)に沿って、実地研修において学んだ家庭学習等の内容や具体的な取組を共有してまとめた。協議した内容は、参考事例として取りまとめ、市町村教育委員会及び各学校に提供する予定である。

3 本事業の活用事例

受講者は、本事業で得た知見を各自の実践に生かすだけでなく、所属する学校や地域に普及する活動に取り組んでいる。この項では、学校での取組において、これまでの実践に本事業で得た知見を加え、学校全体で授業改善や学校改革に取り組んでいる学校を紹介する。

(1) 橋本市立橋本小学校

平成27年度に大仙市立大曲小学校に派遣した受講者の所属する学校である。

ア 授業改善の取組の流れ

大曲小学校の取組に大きな刺激を受け、「今の取組では子供たちの学力向上につなげられない」と感じた受講者は、管理職の指示のもと、全校体制で授業改善に取り組んだ。

まず、現職教育において、大曲小学校の具体的な取組とその意義や成果を全教職員で共有した。その上で、受講者が所属する研究推進部において、秋田県での学びを所属校にどう取り入れるかを協議し、研究推進部を中心に、全教職員で授業改善を進めていった。

イ 具体的な改善例

橋本小学校の研究主題は、「学力向上に資する授業づくりの研究～4つの研究テーマからの授業改善へのアプローチ～」である。

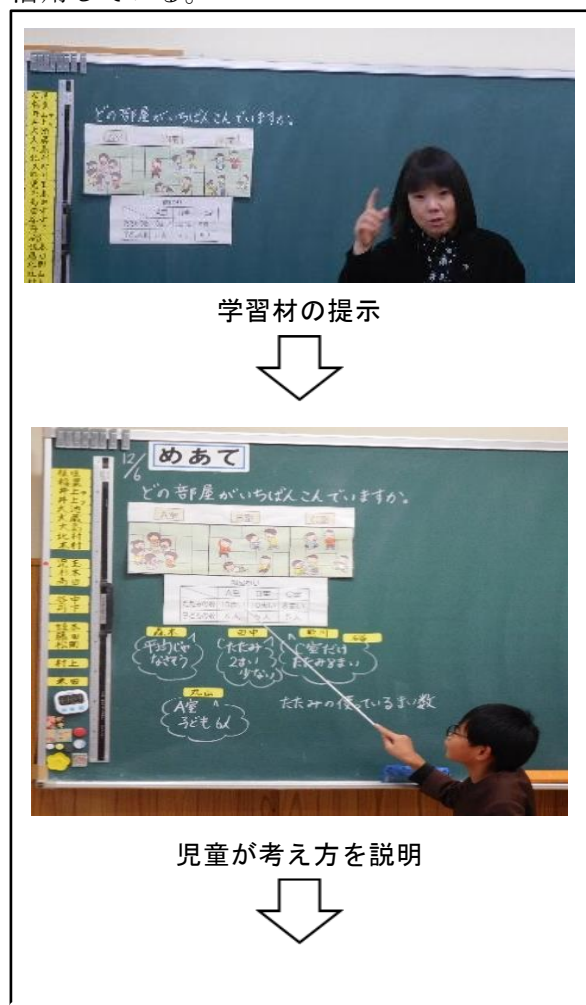
この研究主題に取り組むにあたり、学習活動の活性化を促すため、「学力向上の基盤となる6つの指導ポイント」(図5)を設定している。

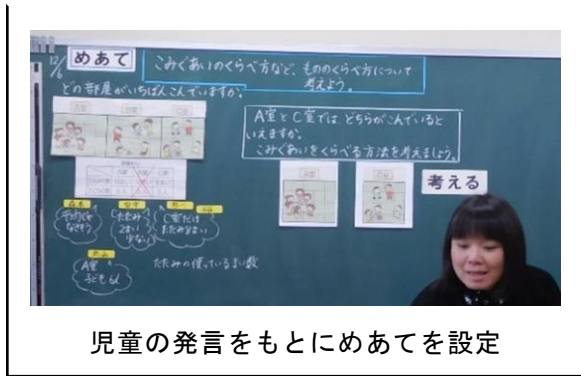
- ①フラッシュシートを活用した授業づくりの工夫
- ②集中力を高める机上の整理・整頓の徹底
- ③チャイム着席で、即、授業
- ④児童の「話す」「聞く」と教師の「話す」「聞く」
- ⑤よさやつまずきを発見する机間指導
- ⑥家庭学習を促すリレーノートの実施

図5 学力向上の基盤となる
6つの指導ポイント

これらのポイントは、橋本小学校のこれまでの実践や、県内外の学力向上に成果を上げている学校の取組事例を参考に作成されている。特に①②④には、秋田県の取組から受講者が得た改善への示唆が取り入れられている。今回は、主に①を取り入れた実際の授業について取り上げる。

橋本小学校では、児童に学習の見通しをもたせることや板書の構造化等を目的として、「めあて」「考える」「まとめ」「ふりかえり」と書かれたカード(フラッシュシートと呼ばれている)を全学級で作成し、授業において活用している。





児童の発言をもとにめあてを設定

図6 導入からめあての流れ

導入では、本時のねらいを達成させるために適した学習材を提示する。その学習材を基に児童が自ら「問い」を見出し、「めあて」を生むよう、発問や問いかけを繰り返して授業は展開していく（図6）。

展開では、導入での知識を基に、常に課題や疑問に対して個人思考、ペア思考、グループ思考を行う（写真4）。また、いくつかの意見が出た後は、それぞれ個人でそう考えた理由の説明をノートに書かせたり、黒板の前で説明させたりという活動を取り入れていく（写真5）。



写真4 ペア思考の様子



写真5 黒板の前で説明している様子

支援の必要な児童には、「お手上げさん」という手立てを取り入れ、答えは決して言わないが、考えるヒントを与える機会を設けている。これは、受講者が考案した手立てであ

り、児童は抵抗感なく、ヒントを求めて集まり自ら解決に向かっていく（写真6）。



写真6 お手上げさん

終末では、「ふりかえり」の5つの項目が設定されており（図7）、めあてや学習材に即して、番号を指示して振り返りを行う。これも、受講者が考案した手立てであるが、大曲小学校でも、今年度取り入れているものである。このことから、両校が同じ方向に向かって授業をよりよく改善していることが分かる。

①わかったこと	【今日はどんなことがわかったか。】
②ポイント	【大事だと思うこと（ポイント）は何か。】
③比べて	【友だちの考え方を聞いて、 始めの自分の考え方とどう変わったか。】
④役に立つ	【今日の学習は 生活の中のどんなこととつながるか。】
⑤次に	【どんなことを勉強したいか。】

図7 「ふりかえり」の5つの項目

ウ 授業改善の成果等

取組を進めていく中で、児童に見られた一番の変容は「自主性」であるという。橋本小学校の教員は、この実践を通して、授業で「めあては何か」と児童に考えさせることからでも、児童の自主性が身に付くことを実感している。この児童の姿は、受講者が大曲小学校での実地研修において、最も刺激を受けたことであり、授業改善の取組によって、橋本小学校の児童に大曲小学校の児童と同様の自主性が育ちつつあることに手応えを感じている。

また、全学級でこの取組を実施することで、授業中の児童の様子だけでなく、教員にも授業づくりに対する以下のような意識の変化が現れている。

- ・書きながら思考することが大事であり、しっかり書かせる指導を心がけるようになる。
- ・授業のスタイルが決まっているため、授業づくりに悩みを抱える若手教員にとっても

取り入れやすい。

- ・授業づくりにおいて、授業展開ではなく、付けたい力を意識した授業内容を十分に考えることができる。

橋本小学校では、今回紹介したものだけではなく、「自学ノート」(写真7)の工夫や45分間の授業を行うための時程の工夫、部会の研究テーマを通した、学校の研究テーマの推進等、多岐にわたる改善の取組を行っている。

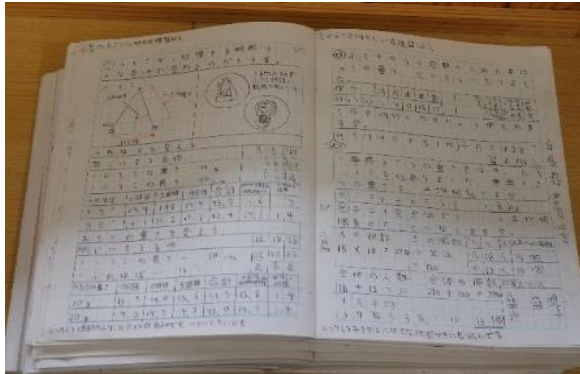


写真7 自学ノート

このように橋本小学校では、受講者を中心に、常に取組の改善を図っており、現在は、学習内容の定着を一層図ることができる振り返り活動の在り方について検討している。

(2) 新宮市立城南中学校

平成27年度に大仙市立大曲西中学校に派遣した受講者の所属する学校である。

ア 学校改革に向けて

城南中学校では、これまで学力や生徒指導に課題を抱えた時期がある。例えば、保健室は学力定着に課題を抱える生徒の居場所となり、授業中でも常に生徒が10人程度は来室しているという時期が続いた。

そこで、城南中学校では、このような状態の改善に向けて、

熱い心で向かい合い

①授業で耕し②学級で耕し③活動(生徒会・部活・行事)で耕す城南中学校

を基本姿勢とし、全教職員一丸となって学校改革の取組を試行錯誤しながら実行してきた。

イ 具体的な取組

城南中学校では、自校と似た状況から学校

改革を果たした県内の中学校を視察し、そこで得た知見に、受講者が大曲西中学校での実地研修で得た知見等を取り入れ、学校改革に向けた取組を実施した。

城南中学校の研究推進体制は、教員が①授業研究部、②生徒指導部、③人権教育部の3つの部会に分かれ、それぞれの取組を検討し、全教職員で共有した上で取り組んでいる。受講者は①の授業研究部の部長であり、授業研究部の進める取組に大曲西中学校で得た知見が生かされている。ここでは、授業研究部の取組である「授業の5原則」「自主勉強」「ミニ授業研究会」について取り上げる。

(ア) 授業の5原則

授業研究部では、生徒や教員自身による授業アンケートと、全国学力・学習状況調査結果等から、次年度の具体的な取組を提案し、実行している。その取組の一つが「授業の5原則」(図8)である。

城南中学校授業の5原則(授業で耕す)
～生徒を置いてきぼりにしないために～

1. 「めあて」の提示
分かりたいことを具体的に示す
2. 授業の流れを示す
見通しを持ち授業を受ける
3. 活動を取り入れる
話し合い 学び合い 作業 体験
視覚教材 発表 言語活動 討論
聴き合う
4. 板書の工夫
丁寧 見やすい 要点の整理
5. 終末
まとめ…学習内容の整理
ふり返り…自分自身に関すること
分かったこと
発見・驚き
自分の考えや態度、発言

図8 授業の5原則

「城南スタイル」として詳しく教授活動が設定され、教員が教科に関係なく共通認識の元、授業を構成できるようになっている(写真8)。この教授活動にも、受講者が大曲西中学校で得た知見が生かされている。



写真8 生徒が説明している様子

大曲西中学校ではどの学級にも、黒板の左側に「めあて」「自分の考え」「学び合い」「ふり返り」のカードが備えられており、どの教科のどの教員もこれらを意識して授業を構成していた。「自分の考え」「学び合い」などの時間設定が適切であり、「めあて」から「ふり返り」までの授業の流れを見越した板書計画が毎時立てられていたという。

また、めあてを生徒から引き出すための学習課題が十分練られており、この課題は「学び合い」の中でも、深くまで追究していけるものになっていた。このような気づきを、受講者は授業5原則の中に取り入れている。

(イ) 自主勉強

大曲西中学校区では、家庭学習に小学校1年生の2学期から、中学校まで継続して取り組んでいる。受講者はこの取組を参考にし、授業研究部が中心となって、平成28年度から城南中学校の自主勉強を推進している。

具体的には、生徒の主体的な取組を促すために、教科ごとに自主勉強で行う内容と、「自主勉ノート」の参考例を示した手引きを作成している。また、各学年では、自主勉強に取り組む目的や方法を生徒に説明し、確実に生徒に力を付ける自主勉強にするための手立てを講じている(写真9)。

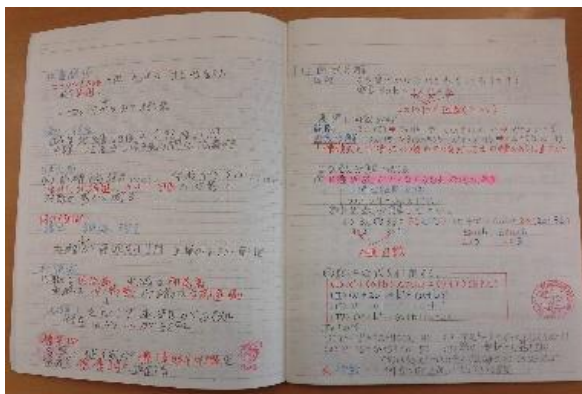


写真9 自主勉ノート

自主勉強の取組で特筆すべきは「昼サポ」である。これは、「自主勉ノート」に取り組めなかった生徒を対象に、昼休憩に担当教員がサポートするというものである。

また、今年度は「ふり返りタイム」という取組を始めている。ほぼ習慣化されてきた自主勉強の取組を次の段階に進めるため、「より主体的で、より力の付く自主勉強」に発展させていくにあたり、生徒同士の「学び合い」を自主勉強にも取り入れる試みである。1ヶ

月分の自らの自主勉強を振り返り、どんな工夫をしたのか、どういうところが良かったのかを学級内で紹介して、評価し合うというものである。この取組は、生徒の実態に合わせて、各学年で工夫・改善しながら取り組んでいる。現在、「自主勉ノート」の定着率100%をめざして、この取組を続けている。

(ウ) ミニ授業研究会

中学校は教科担任制であり、研究授業やその後の研究協議を行ったとき、出される意見等にまとまりがなかったり、出された改善点が、協議参加者全体のものにならなかったりすることがある。しかし、大曲西中学校では、教科の枠を超えて、全教職員で示された視点に沿って授業を参観し、その視点に沿って協議が行われていた。城南中学校でも、授業を考える視点(図9)を設定したミニ授業研究会を開催し、授業研究の活性化を図っている。

授業を考える視点【共通】

日時	月	日	教科等	
授業者	年	組	氏名	
指導計画	(1) 単元：目標達成のための指導計画(単元・本時)が考えられている。			
	(2) 単元：目標達成のための評価計画(単元・本時)が立てられている。			
指導	(3) 学習の目標(めあて)、学習の見通(流れ)が書かれている。		◎	
	(4) 学習のねらいや授業の流れにそって、学んだことがわかる板書をしている。		◎	
	(5) 自分の考えをまとめたり、意見交換したりして、考えをまとめる場面がある。		◎	
	(6) 学習形態(個人・ペア・グループ・一斉)の工夫をしている。		◎	
	(7) 学習したことのまとめや振り返りをしている。		◎	
	(8) 学習への興味・関心や課題意識をもたせる教材・教具を使っている。			
	(9) ねらいに沿って発問を工夫している。			
	(10) 指示が明確でわかりやすい。			
	ついで	(11) 子ども表情・つぶやき等の反応や発言を活かしながら授業を構成している。		
		(12) 学習の理解や課題解決を助けるワークシートや資料等を使っている。		
(13) 温かみのある表情で、生徒を見ながら、丁寧に、適切な音量で話している。				
(14) ねらいに沿って言語活動を設定している。				
(15) 基本的なノート指導やノートを効果的に使う指導をしている。				
(16) 一人ひとりの学習活動を把握し、個に応じた指導・支援をしている。				
学習環境		(17) 清掃が行き届き、整理整頓された環境である。掲示物が工夫されている。		
		(18) 礼儀や言葉遣い・学習ルールを身につかせようとしている。		
子ども様		(19) 学習の準備や席・姿勢等の学習の構えができています。		
		(20) めあてを理解して意欲的に取り組んでいる。		
	(21) 先生の説明や友だちの意見を良く聞いている。			
	(22) 話し合いをするときの約束を守って伝え合っている。			
	(23) 友だちと協力しながら学習している。			
	(24) ノートやワークシート等に丁寧に書いている。			

図9 授業を考える視点

ミニ授業研究会とは、限られた時間を有効に活用して校内研修の機会を確保する取組である。まず、授業者と授業研究部員で事前研修を行い、研究授業についての「授業を見る視点」を定める。研究授業では、示された「視点」に対して、参観者が気づきを付箋に書く。そして、事後研修では、定めた視点に基づいて協議を行う。この方法は、協議の長時間化を避けるとともに、参観者の気づきを参加者全体で共有しやすいという利点があ

る。このように、全ての生徒の学力向上を目指して、日々研鑽を積んでいる。

ウ 取組の成果等

受講者によると、大曲西中学校において最も参考になったことは、生徒の自主性を育む取組であり、大曲西中学校の生徒の、あらゆる場面において自分で判断し、適切に行動している姿が印象に残っているようである。そしてそれを育んでいるのは、大曲西中学校全教職員の、「事の大小は関係なく、できていないことを見逃さず、考えさせて、できるまで待つ」という指導の仕方であると感じたようである。

城南中学校では、受講者が実地研修で学んだ視点も取り入れた様々な取組を実践した。その結果、生徒自身が自分に誇りをもち、更に学校も地域に誇れる学校へと変革してきている。また、教職員の意識も変容し、全教職員で繋がり合い、取組を推進しているという実感をもって教育活動を行っている。この姿が、生徒に伝わり、生徒も繋がり合っている実感をもって学校生活を送っている。城南中学校は、「ここが取組のスタートラインである」と全教職員で確認し、「めざす生徒像」の実現に向けて、教育活動に取り組んでいるところである。

4 今後の取組

県教育委員会では、学力向上を重点目標の一つとして取り組んできた結果、平成29年度全国学力・学習状況調査において、児童生徒の平均正答率は概ね全国平均と同程度となった。また、「国語の授業が分かる」や「ノートに学習の目標やめあてを書いている」と回答した児童生徒の割合も増加傾向にある。特に、中学校において課題のあった「和歌山の授業づくり 基礎・基本 3か条」の「3 授業のまとめ・振り返りの時間を確保する。」については、関連する質問紙調査結果において、本県の肯定的に回答した生徒の割合が全国平均に近づいた(表2~4)。これは、学力向上に成果を上げている県外の学校から学んだ授業づくり等について、本事業で派遣した教員の実践や普及も要因の一つであると考えられる。

表2 「国語の授業の内容はよく分かりますか」

児童質問紙	対象校 (注)	県	全国
H27	81.1	82.8	82.0
H28	81.2	81.2	80.7
H29	82.4	83.3	82.2
生徒質問紙	対象校	県	全国
H27	69.7	70.2	74.3
H28	70.7	72.7	74.1
H29	76.2	73.9	74.9

表3 「授業で扱うノートには、学習の目標(めあて・ねらい)とまとめを書いていたと思いますか」

児童質問紙	対象校	県	全国
H27	85.8	82.8	87.1
H28	89.8	88.0	87.9
H29	91.6	91.5	88.7
生徒質問紙	対象校	県	全国
H27	74.0	68.4	73.7
H28	80.9	76.0	76.8
H29	87.0	82.3	80.3

表4 「授業の最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」

生徒質問紙	対象校	県	全国
H27	57.6	53.1	59.3
H28	62.1	59.1	63.1
H29	72.4	65.2	66.1

本事業は、平成29年4月に策定した「和歌山県長期総合計画」、今年度策定の「第3期和歌山県教育振興基本計画」及び「平成30年度学力向上対策」にも位置付けている。今後も、中核教員の育成と学力向上に効果的な取組の普及を一層推進していく必要がある。また、今年度は本事業の受講者を中心にした「地方別授業づくり研究会」を発足させ、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりの研究推進と、教科研究のネットワーク構築支援に取り組んでいる。この取組を通して、各地方の教員の授業力向上を図るとともに、本事業の受講者同士のネットワーク構築も強化する予定である。

<注釈>

注 対象校とは、平成27年度と平成28年度の本事業受講者が所属した学校を指す。